

Jalan Jalan インドネシア

第61回「パプア州ビアク島に残る太平洋戦争の戦跡 西洞窟

日本兵の最後の組織的抵抗、そして終焉の地 その1」

ジャカルタから空路約6時間でたどり着くインドネシア最東端の地、パプア州のビアク島は太平洋戦争の激戦地の一つで、現在も多くの戦跡とともに日本兵の遺骨が草葉の陰で、洞窟の中で海水に洗われる波間で故国へ帰ることも叶わず、朽ち果てようとしている。

1990年代はジャカルタからスラウェシ島のウジュンパンダン（現在のマカッサル）を經由する航空便だった。現在ビアク島のフランス・カイシエボ空港まで複数の航空会社の便が飛んでいる。もっともコロナウイルス禍の制限で現在では定期便はかなり減便されているという。

太平洋戦争で日本は拡大し切った戦線を縮小しながら絶対国防圏と称する徹底抗戦の範囲を設定し、ビアク島はその一角を担うことになり、精鋭部隊が増派され、ビアク島南東部の海岸沿いにある飛行場を見下ろす北側の高地の鍾乳洞に司令部を設けた。

これが俗に西洞窟と呼ばれ、東方の東洞窟と並ぶ天然の要塞として重要な役割を果たすことになる。司令部機能のほかに、兵舎、野戦病院、補給処などとして多くの日本兵が夜露を凌ぎ、戦火を避けた。一時はこの西洞窟内の三層の居住空間に約2000人が身を隠していたという。



洞窟のある場所では日本人を歓迎する日本語の看板もある（上）、洞窟入り口近くにある石碑（右）



1944年5月27日、猛烈な米艦隊からの艦砲射撃の援護下、米軍が島南東部ボスネック海岸に上陸を開始した。その兵力25000人。迎える日本軍は総兵力約1万400人。

米軍は飛行場奪還を目指す一方で司令部のある西洞窟攻略作戦を進め、激戦地として「北のアッツ、南のビアク」といわれ、「ジャワは極楽、ビルマは地獄、死んでも帰れぬニューギニア」とも例えられる激しいニューギニア戦線の中でも特別に激戦が繰り広げられた、それがビアク島だった。

そのビアク島の状況を複数回にわたって報告する。1回目はまさにビアク戦の日本軍の根拠地となり、この陥落で組織的戦闘が終了し、あとはゲリラ戦、逃避行、そして食料不足による栄養失調とマラリアなどによる熱帯特有の病気で倒れた多くの日本兵。その最後の拠点となった西洞窟である。

現在は地元のパプア人が管理する資料館、展示室、屋外展示そして洞窟がそれなりに整備されて、インドネシア人やたまに訪れる日本人観光客を待っている。現地ビアクの小学生が団体で見学に来ることもある。

資料館や展示室、屋外展示スペースには1945年当時の戦況を伝える地図などとともに回収された日本への鉄カブト、飯盒、銃弾、砲弾、薬ビン、飲料ビン、小銃などが雑然と陳列されている。

その一角を奥へ進むとぼっかりと空いた空間があり、それが西洞窟への入り口となる。湿って滑りやすい階段を恐る恐ると降りれば大きな空間が奥まで続く。奥は行き止まりだが空爆で天井部分が崩落してできた穴から空を仰ぎ見ることができる。



洞窟内へ続く 中央はかつての階段、急で危険なため新たな階段が右に作られた (左)

この洞窟で多くの負傷した日本兵が命を落とした (右)



この洞窟にあった野戦病院では最後に脱出する兵士らが身動きできない重傷、重体患者に自決用の手りゅう弾を残し 160 人が自ら命を絶ったと伝えられている。洞窟の中から最後の抵抗を試みる日本兵に対し米軍はガソリンのドラム缶を転がして落とし、それを銃撃して洞窟内を火の海に変えたとされる。多くの日本兵の最後の場所となった洞窟内には一種独特の空気が流れている。

薄暗い洞窟内には朽ちたドラム缶だけが残され、当時を偲ぶものは回収されて他にはない。

ビアク島での戦闘では日本兵は約 1 万人が戦死、対する米軍側の被害は約 500 人と伝えられている。これまでの厚労省の遺骨収集で約 4000 柱が帰国しているが、依然として約 6000 人の兵士が死してなお異郷の地にその屍を晒している。こうした海外の戦地での戦死者の遺骨収集は、例えば米軍の場合はハワイに専門の機関があり、最後の 1 兵士まで母国に戻すための懸命の努力が現在も続いている。

ところが日本は依然として 100 万人の遺骨が海外に残されているという。パプア地方を訪れた日本人にはぜひビアク島を訪れて西洞窟へ足を運んでほしい。

西洞窟を米軍が制圧した 1945 年の 6 月 27 日から間もなく 75 年の月日が流れる。

洞窟の最深部は米軍の爆撃で天井部分が落ちて明るい (右)

洞窟奥に残るドラム缶、米軍がガソリンを入れて洞窟に転がし、銃撃で発火させたという (下)



米軍の爆撃で陥没した洞窟の最深部を上から見る (右)

